

第 21 回 英語教育「なんでだろう？」座談会

日時:2022 年 3 月 6 日(日)10:00~12:00

場所:ZOOM

開催テーマ: 英語教育におけるエビデンス

講師: 亘理陽一先生(中京大学), 草薙邦広先生(県立広島大学), 寺沢拓敬先生(関西学院大学), 浦野研先生(北海学園大学), 工藤洋路先生(玉川大学)

参考書籍: 亘理 陽一, 草薙 邦広, 寺沢 拓敬, 浦野 研, 工藤 洋路, 酒井 英樹

『英語教育のエビデンス: これからの英語教育研究のために』(研究社, 2021 年)

コーディネーター: 臼倉美里(東京学芸大学)

報告者: 加藤嘉津枝(日本大学)

今回の座談会には、大学生、大学院生、中学、高校及び大学の先生方など、総勢過去最多 109 名の参加があった。会の前半は、コーディネーターの臼倉先生と5名の講師の先生方の公開座談会で、臼倉先生からの質問をもとに講師の先生方にお話をいただいた。今回のテーマは英語教育におけるエビデンスであるが、エビデンスとはそもそも何かといった基本的な話から始まった。それによると、ここでのエビデンスとは、X すれば Y になるといった因果関係を示唆する証拠で、日常言語で使われる「証拠」「エビデンス」「根拠」という言葉とは違う、かなり狭義の専門用語ということであった。臼倉先生からは、「英語教育研究に対する著者の先生方の問題意識や憤りを感じながら本を読んだが、何(誰)に対して憤りを感じているのか?」という率直な質問もあり、以下のような興味深い回答があった。

今の日本の英語教育のこれまでの蓄積をもってしても、こういう教え方をしたらよい、と提案できるだけのエビデンスが揃っていないというのが現状だといえるにもかかわらず、「エビデンスに基づいた英語教育の指導法」といったような言葉で、本来エビデンスと呼ぶべきではないものを利用して、指導法の効果を謳っている研究者、出版社のあり方。それを受けて、じゃあ、そういう教え方をしましょうという流れが教育の現場に生まれてしまっていること。こうしたことに警鐘を鳴らしたいとのことだった。

この議論からは、言葉に惑わされて安易にそうした指導法に飛びつかないで、自身の教育現場の状況に合った指導法を丁寧に作り上げていくことの重要性について学ぶことができた。この他にも前半では先生方間で様々な議論が活発に行われた。

会の後半は、フロア全体からの質問・コメントや研究推進委員から前もって寄せられた質問に対して、講師の先生方が回答するという形で進められた。様々な議論があったが、中でも以下は特に印象に残っている。

「エビデンスを使おうと思った時に、自分に都合のよいエビデンスだけを探して、ピックアップして、都合の悪いものはみなかったこと、なかったことにするということが行われていることに問題がある(エビデンスのチェリーピッキング)。」それを防ぐために、エビデンス

を使う人の良心だけに頼るのではなく、研究を蓄積したメタ分析が行われるべきであり、それを参照するようになるのが一つの方向性として望ましい。少なくとも焦点が定まっているものに関しては、恣意的に作為が入り込めないような状況を作ることが研究者の仕事の一つではないか、ということだった。

また、追試(replication)がこの分野であまり行われていない原因として、オリジナリティ、独創性の過度な推奨が挙げられていた。追試は独創性がないということで評価されないままだと、常に先行研究とは異なる新しい指導方法や測定方法を用いることになり、研究が統合されて積み重なっていくことはなく、メタ研究もできない。ここが大きな問題であり、学会の口頭発表や論文査読において過度な独創性を求めることはやめるべきだというお話だった。他にも貴重なお話を数多く聞くことができ、今後の研究の方向性を考えていくにあたり、とても学ぶことの多い座談会だった。